

---

# テイルズ・オブ・ティラスイール

俊介

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ティルズ・オブ・ティラスイル

### 【Nコード】

N9128A

### 【作者名】

俊介

### 【あらすじ】

ティラスイル大陸スメリア国ブルグ村から世界的に有名な魔術師、ジャックとローザの一人娘であるルーナが世界を滅びに導く者を倒す旅に出た。果たして彼女の旅は無事に終わるのか？！

## ブログ&第一話（前書き）

皆さん、初めましてこんにちわ。

テイルズオブティラスイル原作者兼著者の俊介です。

さて、このテイルズゝは本来はパソコンにて発表するつもりで執筆していた（初期原案はノートにまとめてありました）のですが発表直前でパソコンが故障し、一時は発表せずにお蔵入りするかと言う所まで追い込まれてたこの小説。

しかし、せつかくかなりの時間を使用して書いた長編小説なのに、日の目を見る事もなく廃案にする事は悔しいので前々から携帯にて登録していた『小説家になろう』さんを使い公開する事に踏みきりました。

まだまだ未熟者ですが、お付き合い頂ければと思います。

## プロローグ&第一話

時は魔法暦199X年、スメリア国のはるか北に位置する農業の村、ブルグ村・・・

この村に住む魔導師の間に一人の娘がいる。名前はルーナ。満月が綺麗な夜に生まれ、名前を決める時に神官が『月を司る神、ルーナの名にあやかっつてルーナにしてはどうか』と言うので、名前がルーナになったのである。

そのルーナ、小さい時から『将来は冒険者になりたい』と言い張つて親を困らせていたがこの物語が始まる3ヶ月前に名付け親である神官に『この世界が腐る前に、悪しき存在を全て滅ぼせ』と命令を受けた事により彼女の壮大な冒険譚は幕を開けるのであった。

そして物語は彼女が村を出る前の晩、自宅の自室で旅の用意をしている場面から始まる。

### 第一話

『遂にあたしも世界を自由に旅してまわれる冒険者の仲間入りかあ。どんな事があたしを待ってるんだろう』

革のリユックに冒険に欠かせない物を詰めながらルーナは物思いに耽っていた。

と、その時である。

部屋の小窓を叩く音が聞こえる。

ふと窓に目をやると、仔猫くらいの大きさを背中には羽が生えている不思議な生物が足で窓を器用に叩いていた。

『あ、ナルだ』あたしね、明日からこの村を出て世界を旅して回るんだあ』

窓を開けると彼女は自慢気に話しかけた。

すると、驚いた事にナルは人語を喋りだした。

『本当に行くんだな。オレも行こうかな？』

そう言う彼女が開けた窓から部屋に入り、ベッドに横たわった。

『・・・ウィックに叱られても知らないよ』

ウィックとはルーナの9歳年下の男の子で、伝説の魔剣士、ルシア・グラファイトの様な勇敢な剣士に憧れている子だ。

『良いんだ。今日もオレの晩飯を食べたから家出してきてやったんだ』

ベッドに横たわりながらふてくされた感じの語調で話す。

『ついて来るのは良いけど・・・、辛い旅になるかも知れないよ？少し声を低くしたルーナが呟く。』

『オレはルーナの顔が見れたらそれでいい』ナルが少し照れながら言った。

そして・・・旅立つ日の朝、村の集会所ではルーナの旅立ちを祝う儀式が執り行われた。

『えー、本日はお日柄も良く旅立ちの日にはもってこいとなりました。これから、あたしルーナは世界を旅して回ります。今まで散々迷惑をおかけした村の皆さん、そして今まで何一つ不自由なく育ててくれた母や父には、感謝しています。道中、くじけそうになった時や辛いときは皆さんの顔を思い出します。皆さんも時々、あたしの顔を思い出して下さい。これにて挨拶及び旅立ちの儀式を終わります』

そう言うルーナは集会所の壇上から降りて村の出口に向かって歩きだした。

もちろんナルも一緒だ。

『ルーナ、辛い旅だと思うけど諦めたりしちゃダメよ？』

ルーナの母、ローザが涙を浮かべながら話しかける。

『母さん・・・!!!』

何故だかは分からないが自然と自分の目にも涙が浮かび始めた。

そして母の胸に飛び込むと小さな子供の様に泣き始めた。

『ルーナ・・・、子供はいつか親から離れて行く物なの。あなたは、今その時を向かえたのよ。だから、泣いてないで行ってらっしゃいな、辛くなったらいつでも帰っておいで』そう言つとローザは涙を拭いながらルーナを優しく離れた。

『それじゃ行つてきます!!!』

そう言つと村人の声援を背に颯爽と歩きだした。

もう寂しくなどない、今から一緒に旅に出る相棒、ナルがいるから・  
・

第1話・・・終了

## 第二話

ブルグ村を出て数時間・・・ルーナとナルは王都・ツエップへと続く街道を、南へ南へと南下していた。

『お腹空いたから何か食べようか？近くに、河があるみたいだからさ』

彼女がそう言うのとナルは待つてましたと言う感じで目をキラキラさせた。

『行こう、今すぐ行こう！』

子供の様にはしゃぐナルを見たルーナは顔を綻ばせた。

サアアア・・・

ブルグ村近くの湖からイザル湾へと流れてるブルグ川のせせらぎが心地良い。

『さて・・・』

座れそうな岩を見つけたルーナはその岩へと腰かけるとローザ特製のツナサンドイッチが入ったボックスを開けた。

その瞬間を見逃さなかったナルは器用に口でパクツとくわえると一口で平らげてしまった。

『ナル！行儀が悪いわよ！！』

ルーナの怒声が静かな川辺に響く。

それにビクリしてなのは定かではないが木々に止まって羽を休めていたであろう鳥達が一斉に羽ばたいて飛び立ってしまった。

『悪かった、そんなに怒らないでくれよ。』

食後、少しだけ休んだ一人と一匹は少しづつ王都へと近付いて行っていた。

そして、ナルが口を聞いてもらえたのは陽が西へと傾きだした頃だった。

『ナル？どっちが良いと思う？陽が沈み出し真っ暗になりつつある不気味な森を強行軍で抜けるか、ここから南に10km程度行った場所にある小さな村で一泊するか』

するとナルは少し考えた後に、意外な返事を返して来た。

そう、真っ暗になりつつある森に強行突破を仕掛ける方向で行こうと言ったのだ。

こうして真っ暗な森に足を踏み入れたのだが今から起こる恐怖を一人と一匹は知るよしもなかった。『うわああああ、ルーナ！オレ、怖いよ！今更だけど・・・村に行こうぜ。お化けとか出そうだああ』森に入って数時間後、ルーナが簡単な魔法で明かりを出して歩いていった時にナルがかなり震えた声で言った。

そんな時である、どこかで低い唸り声・・・それも前後左右全てから聞こえてきた。

これがナルの恐怖心に拍車をかけたのだろう、ギャツ！と叫び背に生えた羽を羽ばたかせ逃げてしまった。

一人残されたルーナは護身用ナイフを出してなるべく安全で見通しの聞く、とは言っても既に深夜になっており唯一の明かりは自分で出した照明魔法の明かりだけだ、場所に音を立てずに移動、そして明かりの光度を落とし相手の出方を待った。

そんな折り、背後から声が聞こえたのですぐ武器を構えて明かりの光度をフルまで上げて目標を捉えた。

そこにいたのは文献でしか読んだ事のない、ゾンビと呼ばれる不死と思われる肉体を持つアンデッドモンスターだった。

『クツ！か・・・かかってきなさい！』

強がってみるが声が震えてしまっている。

一方その頃・・・ナルはと言うと

あれからかなり逃げ回ってどこにいいのかも分からなくなってしま

っていた。

その時、背後から何かが彼者かが体を触った。

『うわあああ！！！オレを食ってもおいしくないぞ！』  
気が動転したのか叫ぶ彼を何者かが抑える。

『安心しろ、オレ達は人間だ。オレ達はここに出没するアンデッドを殲滅する為にスメリア国際特殊諜報機関V・S・S・Eから送られて来たアラン・ダナウェイだ。そして、後ろにいるヤツがジョルジョ・ブルーノだ。ところで、アンタは何者で何をしてんだ？モンスターの類じゃないみてえだが』

アランと名乗った人物は手にしている拳銃に装備されているフラッシュライトをかざしてジョルジョを呼び寄せた。

『アランから紹介のあったジョルジョだ。以後よろしくな』  
ニツと笑うとすぐ真剣な表情に戻った。

どうやら本当にアンデッド退治に来た様だ。それならルーナを助けてもらわなければ！

『オレはナルって言います。ブルグ村から、仲間のルーナってヤツと冒険に出たんだけど真っ暗な森を強行突破しようって言うたら、こんな事に・・・』

泣き出しそうな声をあげるナルをアランが、少し心配そうな顔で見つめていたが、すぐに助けてやるから心配すんなと言ってくれた。

『はあああっ！！』

ルーナとゾンビ達の死闘は続いていた。

最初はかなり優勢だったのだが、次第に数が増え出したからか今では劣勢になっていた。『ナル！早く帰ってきなさい！！』

そんな死闘を、演じている時に限って最悪の展開は廻ってくるのだろっ。

照明魔法の効力が切れる予兆が現れた。

少しずつ薄暗くなって行くと光は消えてしまった。

こうなってくると完全に負け、しかもこの場合の負けは死、である。

もうダメか、と覚悟をきめた時。『大丈夫か！今助ける！なるべく伏せてろ！こっちは拳銃だ！当たると死ぬぞ！』

何者かがルーナに助言を加える。

『おい！ルーナア！！助けに来たぞ！』

元気そうなナルの声が飛んできた。

どうやら助けを求めに行っていた様だ。

『ジオルジョ！背後を頼む！オレはルーナの安全を確保する』

声からは判別不能だが、年齢は20代前半と言ったところであろうか。

『ナル！その人たちは？！』

焦燥を抑えつつナルに尋ねる。

しかしゾンビに対する攻撃の手は休めない。

『今の人がスメリア国際特殊・・・なんとかつて所からこの森に出現するアンデッド達を倒すために来たアラン・ダナウェイさんで、ジオルジョさんは今オレの後ろにいる！』

『オレがアランだ！アンタの事はナルから、全て聞かせてもらった！ブルグ村から冒険に出たそうじゃねえか！面白そうだからオレとジオルジョも混ぜてくれ！』

そう良いながら胸ポケットにあるマガジンを取り出したのは良いが肝心の弾丸が入っていないかった。

ここに来るまでかなりのゾンビを相手にしながらやって来たために弾が尽きているのに気付かなかった。

『チッ！ルーナ！方針変更だ！オレの誘導に従え！理由は何と無く分かるだろ？！』

アランはフラッシュライトをルーナが居るであろう場所に向けた。するとルーナの青く長い髪が見えた。

『アラン！こっちも駄目だ！一度森から出て態勢を立て直す！』  
ジオルジョが叫ぶ。

そして、アランを先頭にルーナ、ナル、ジョルジョの順に森の出口まで走った。

既に夜は明けておりうつすらと明るくなりだしていた。

そしてたどり着いた街で彼等は眠りに着いたのだった。

第二話・・・終了

### 第三話

前回までのあらすじ

ティラスイル大陸北方のスメリア国にあるブルグ村に住む世界的に有名な魔術師夫婦の一人娘、ルーナとナルは世界を破滅へと導く存在を倒す為の旅に出た。

その道中で真つ暗な森を強行突破する作戦に出たが、アンデッド達に襲撃され、あわや全滅の危機に頻する。だがスメリア国際特殊諜報機関V・S・S・Eの隊員、アラン・ダナウェイとジョルジョ・ブルーノの二人に救われる。そして、アランとジョルジョの二人と森を抜けた地点にある小さな街の宿屋で一泊したのであった。

### 第三話

『まったく・・・アンタが真つ暗になりつつある不気味な森を強行突破しようって言うから突破しようとしたらアンデッド達に強襲を受けたのよ?!』

昨日の夜、厳密に言えば強襲を受けたのは今日の深夜だ、ブルグ村から遠く離れた密林を抜けようとナルが言い出したから、抜けたがもし途中でアランとジョルジョが来なければ今頃はゾンビの仲間入りを果たしていたかもしれない。

そして当の二人はと言うと、あの森に残したアンデッド達の残党を片付けに行ったのだ。『ううゝ・・・悪かったよう』

こうなつては、いつも強気で振る舞っているナルもまるで母親に叱られている子同然だ。『まあ、今回だけは許してあげる。ただし、今日のお昼ご飯はなしね』

このキツイ一言にナルはしょんぼりした顔を見るとベッドにコロんと転がった。

どうやらナルの抵抗はこの程度しか出来ないようだ。

まあ、それはそれで可愛いが。

―アランとジョルジヨは・・・

『ジョルジヨ、こっちは片付いたぜ！』

ここはルーナとナルが夜中に強行突破をかけアンデッド達に強襲を受けた森。

宿屋の部屋でルーナとナルが同行したいとか言い出したが危険だと諭し二人で殲滅作戦に乗り出したと言う訳だ。

『OK・こっちも片付いたぞ』

ジョルジヨがアランに言い返す。

『んじゃ帰るか！ルーナ達が待つてる！』

アランの指示にジョルジヨは、おう、と言い走り出した。

しかし、彼等は気付いていなかった。

この森の本当の恐怖に・・・

その恐怖は後日語られることになる。

―午後4時頃

『アランさんとジョルジヨさん、遅いわね』痺れを切らせたルーナが足で床をトントンと鳴らしている。

ちなみにここは3階、当然この階下は2階で客室なのだが、宿泊客はこの音が気にならないのだろうか。

フロントのボーイ曰く『満室』との事だ。

と、それは良いとしよう。

いくら何でも遅すぎやしないか。

もしかしたらゾンビの仲間になったのかも縁起でもない事が首をもたげてくる。

そんな考えを振り払おうと必死に他の思考を始めようとするがダメだ。

まるでその考えが呪縛の様にも思えて来る。

『・・・ナ、ルーナ！』

気が付くと既に真夜中になっていた。

しかし、相変わらず状況に変化は・・・あった。

アランとジオルジョが戻ってきていたのだ。それどころかスヤスヤと眠っている。

『ナル、いつアランさんとジオルジョさんが戻って来たの？』

考え事をしていたと思ってたらしいの間にか寝てしまっていた様だ。ナルはルーナに室外に出る様に促した。

そして、その指示を受けたルーナはアランとジオルジョを起こさない様に抜き足指し足で寝室から抜け出した。

何をする為か？

それは彼等のおかしい場所を指摘するためであった。

そして・・・あの森の本当の恐怖が語られる運びになった。

ナルが推測した恐怖はこうだ。

『出かける時の彼等の服装は防弾チョッキの上からV・S・S・E・の刺繍が入った服を着ていて腰回りにはサイドバックがついていた。だが今の彼等にはそれがついていないし、どこにも置いてある形跡がない。と言う事は・・・彼等は偽物、しかも偽物の正体は魔物であり寝たフリをし、自分達が寝静まった頃合いに殺そうとしている』  
『と言いつつ終わった瞬間！！』

本当にその通りの事態が発生した！

いつの間にかアランとジオルジョが扉の前に立っていたのだ。

『ホウ・・・まさかこんナにハヤクワレラの擬態にキヅクとは・・・ダガ遅い！』

アランの片言の発言が終わった瞬間に空間に歪みが発生し、一振りの大鎌が現れて彼女の立っている場所を薙ぎ払った。

だが、ルーナは間一髪でそれを避けるとすぐ部屋を飛び出し、宿屋の外に出た。

本当の彼等は森にいるのではないかと踏んだ彼女はナルを連れて森

に駆け出した。

―本物のアランとジョルジヨは・・・

『くっ・・・魔物に身体を『奪われる』とはな！とんだ失態だぜ。クソが！』

本物のアランとジョルジヨは魔物の作った結界に捕われていた。

どうやらこの森の魔物は、入ってきた人間の姿形をそっくりそのまま自分の身体にしてしまう様だ。

簡単に言々と複製である。

更に恐ろしい事に複製が倒されてしまうと、複製元の生命まで尽きてしまうのだ。

『ルーナとナルが危ねえ！早くこっから出て助けに行きた・・・つて！おいおいおい！』ジョルジヨが不意に叫んだ。

その理由は、どこからか鉈を持ち出したルーナが自分達に迫ってきたからであつた。（どちらかに避けて！）

ルーナの口がそう言っている。

『アラン！左だああ！！』

『おうよ！！』

二人共、左に避けたかと思つたがジョルジヨは右に避けていた。

ガッシャアアアン！！

ルーナの渾身の一振りによつて結界は脆くも簡単に破壊され、捕われていた二人は脱出に成功した。

『アランさん！ジョルジヨさん！大丈夫？』右手に鉈を装備しているルーナが顔面蒼白の彼等に尋ねる。

『ああ、だが・・・どこら鉈を・・・？』

アランがハアハアと息を切らしながら聞いた。

―宿屋脱出時

『マテ！こむスメ！！われラの餌食にしてくれるわ！』

部屋を飛び出した直後に魔物アランとジョルジヨがルーナとナルを

追い掛け出した。

『待てと言われて待つヤツがあるかよ！このタコ野郎！！いや、タコに悪いなあ！だからこの・・・えっと・・・死に損ないが！』

可愛い顔をして何とも言えない馬野郎言を抜け抜けと言いまくるナルと必死に歯を食いしばって走るルーナだったが、武器を持たずに捕まっているであろう本物の彼等を助けにはいけないと言う事で、急遽武器探しに入った彼等。

まずはどこかに身を潜めなければ、と考えたルーナは階段を駆け降り、階段の下にあった箱に隠れてやり過ごした。

そして偽者がどこかに行ったのを確認して、箱から出るとそのまま物置を探して、手元にあった鉈を持ち出したのだった。

『そうか・・・、早く奴らを倒さないと！』一部始終を聞いていたアランとジョルジョ。『ええ、倒して王都に行かないと乗船パスが貰えないわ』

この国は王の発行する乗船パスがなければ、船にのれないと言う事はないのだが、いかんせん料金が高いのだ。

『んじゃあ、今からが本当の意味での冒険の始まりって訳で行こうぜ！』

そう言うのと3人と1匹は森の出口に向かって走り出した。

魔物との決着をつけ、王都・ツエップに行く為に！

第三話・・・終了

## 第四話

『さあ・・・てと、んじゃオレ達の物真似でルーナとナルを殺そうとした魔物の後始末を行うとするか』

アランがニツと笑った。

『ああ、そうだ。ルーナ、コイツを着ける』ジョルジョがルーナに小さい何かを投げた。『・・・？』

それを両手で受けたルーナは頭に疑問符を出した。

『そいつはV・S・S・E 隊員が作戦実行中にもし行方が分からなくなっても居場所を知らせてくれる高性能探知機だ』拳銃を取り出し、空いているマガジンに弾を装填しながらアランが言った。

『そして・・・コイツをやるよ』

今度は弾丸の装填が終わったアランがルーナにシースに入っている大型ナイフを投げてよこした。

『ソイツは切れ味抜群だ。しかもシースは本革と来た。一生の宝物になるだろうな』

淡々と軽口を叩くが目つきは真剣で身体から燃え盛る炎の様な物があがっているようにも感じられる。

それほどに自分達の真似をされ、ルーナ達に危害が及んだ事を苛立つているのだろう。

武器の装備が終わった所で、アランとジョルジョの間で作戦開始時に取り交わされている合図が始まった。

まずアランが親指と中指をパチンと鳴らす。これを受けたジョルジョが頷くと同時に両者一斉に『GOー!』と叫べば作戦開始だ。

今作戦はアランが指揮を取る事になった。

ルーナはシースからナイフを抜き、逆刃に持った状態で警戒態勢に入る。

いつ相手が襲ってきてても良いように全神経を集中させる。

ジョルジョはルーナをかばう立ち位置で歩きナルはルーナの第三の目、つまり後方警戒を受け持った。

―酒場

『行くぞ・・・3、2、1、0！！』

バキッ！！

殺人犯のアジトに踏み込む時の警官達の要領で二人は息を合わせてドアを蹴破った。

『アラン、お前は右側から頼む』

先に銃だけ室内に入れ、左右に銃口を動かし安全の確保に成功したジョルジョが踏み込みアラン達を手招きする。

『ルーナ、お前はここの確保だ。ヤバいかと思ったら叫ぶんだ。OK？』

さすがは国際特殊諜報機関隊員。

仲間に対する配慮もしっかりしている。

『ええ、分かったわ』

ルーナが呟くと彼等はそれぞれの探索場所に向かっていった。

そして、ドアを蹴破る直前にルーナが彼等に一言。

『絶対に帰ってきてね』

この言葉が終わった直後に、バキッと物凄い音が響いた。

―酒場調理室

『・・・』

それは息を押し殺して獲物が来るのを静かに待ち受けていた。

手にしているその出刃包丁で獲物を切り裂き自らに血の洗礼を浴びせんがために。

『・・・何かいるな、そこか？！』

調理室に踏み込んだアランが作業台の物陰にただならない殺気を感じた為におもいきり作業台を蹴り付けた。

『・・・お・・・マエ・・・コロす』

低い唸り声と共に物陰からユラリと立ち上がり出刃包丁を振りかざしている相手に拳銃を向けたアランが声を荒げる。

『動くな！動くと・・・撃つぞ』

だが、それは動きを止める所か逆に手にした出刃包丁で切りつけようと振り下ろした。

『おおっと！あぶねえ！』

アランはバック転で間合いを取ると同時に、近くにあった中華鍋を持ち上げて渾身の力で持ち上げてあろう事かそれを投げ付けた。

『ゲエエツ』

あまりの痛みに耐えきれずもんどり打つ敵の股間を踏みつけて、トドメをさしたアランは調理室を飛び出した。

― スタッフ休憩室

休憩室と言う事もあつてか壁にはハト時計が設置されており、かなり落ち着いた雰囲気漂っている。

だが、窓の縁には一際存在感が光るアヒルのヌイグルミが置いてあった。

このアヒル、間抜けな顔であるために思わず大笑いしてしまいそうになるジョルジョ。

だが、そこはグツと堪え次の部屋に踏み込み安心した瞬間！

『ブリブリブリッ！』

突然、物凄い屁の音が響いたので足元を見ると誰が何の目的で置いたのかは皆目検討がつかないがブーブークッションが置かれていた！さすがにこれには不意打ちを食らった様だ。あろう事か『ドワーッ！・・・』と叫んだ。

そして一歩さがるが、先程のクッションがまた作動してしまった。

『ブリブリブリッ！』

その何とも言えない豪快な屁の音とジョルジョの悲鳴に気付いたアランがやってきた。

そして一言。

『くさっ!!!』

更にもう一言。

『お前・・・屁こいたろ』

この言葉にカチンと来たジョルジョ。

しかし、ここでキレては面白くない。

ノリの良い姿勢を見せてこそ真の男だ。

だからこそ慎重かつ大胆に言葉を選びながら反論した。

『ごめん・・・さつきから我慢・・・、って何でだよ!？』

思わず漫才のようなノリになる二人。

だが、すぐに元の緊迫した雰囲気に戻ってきた。

『キャアアッ!!!』

今度はルーナが叫ぶ番だった。

―酒場ホール

『ナル!机とイスを重ねて窓を塞いで!』

アランとジョルジョが探索に出向いてからはしばらく考え事をしていたルーナ。

だが、窓の外に視線を戻した瞬間に考え事も吹き飛んだ。

その理由は街の人間全員が正気を失っている目つきで武器と言う武器を片手に装備して、ルーナ達がいる酒場に向かってきていたのだ。中には倒木作業に使用するチェーンソーまで装備しているものもある。

『ルーナ!ここはダメだ!他の部屋から一旦退却しよう』

小さな身体で机を持ち上げながらナルが叫ぶ。

『どうした!』

先程の部屋の探索は終わったのかアラン達に戻ってきた。

が、戻ってくると同時に入り口のドアが敵の攻撃によって破壊されてしまった。

『・・・こう言う場合は』

アランが意を決した様に呟く。

『やった方が良いわね』

ナイフを構えたルーナが相槌を打つ。

そして数秒後、大規模な戦闘が始まった！！

第四話・・・終了

## 第五話

『くそつたれ・・・何だよコイツらはあ！』先ほどまでは安全圏だった筈の酒場の玄関が戦闘区域になってしまった。

そして拳銃で応戦するアランとジオルジョが倒しても倒してもゾンビの様に起き上がってくる街の人々に悪態を吐く。

まあ、コイツらもアランとジオルジョに化けルーナ達を襲った魔物の使い魔なのだろうがやはり人を撃つと言う行為は嫌なものだ。それがいくら魔物の作り出した幻影であっても。

『ルーナ！さっきのナイフで戦うんだ！』

近付いてくる使い魔の顔を殴り、更に腹部に弾丸を一発撃ち込みながらアランが叫ぶ。

『ええ！分かったわ！』

そう言うのとナイフを引き抜き、逆手に構えて使い魔との間合いを詰める。

『てっ！！はあっ！！やあああっ！！』

気合いの籠った声を出しながら正確に相手の急所を突いて行く。

『す・・・すげえ。アランから貰った近距離戦闘用大型ナイフを一回の戦闘で使いこなすとは・・・V・S・S・E・に欲しいもんだぜ』

ルーナにみとれていたジオルジョだが、すぐ近くに迫っている使い魔を見てとると拳銃を構え、頭部に向けて引金を引いた。

ブシャアアッ！！

見事に脳天に当たった弾丸が使い魔の脳漿を吹き飛ばし、行動不能に陥らせた。

『・・・気持ち悪い』

ルーナの近くを飛びながら使い魔を攻撃し、背後を振り返ったナルが呟いた。

『ナル！後ろ！！』

ジヨルジヨのその声で、もう一度振り返るが遅かった。羽を掴まれて地面に押し付けられ使い魔の口内に運ばれようとしているナルを助けようとルーナがとんでもない行動に出たのだ。

『ナルに・・・何すんのよおお!!』

まず相手の顔面にキックを浴びせ、顔をあげ立ち上がった所に膝蹴りを入れた上に顔をナイフで刺すと言う両親が見たら絶対卒倒するであろう行動に出たのである。

『・・・おい、ジヨルジヨ。お前さあ・・・ルーナの事が好きだとか言ってたよなあ?』ナイフを片手に大暴れするルーナを見ながらアランが呟く。

『・・・』

背中に冷たい何かが流れるのを感じながらも彼等はルーナを見守っていた。

そして、30分くらい過ぎた頃には使い魔は完全に沈黙しつづけた。

『これでえええ!! 終わりつとお!!』

ルーナが顔面に回し蹴りを入れると使い魔は倒れ込み二度と立ち上がる事はなかった。

『・・・ルーナ』

返り血で顔を真っ赤にした上にナイフを構え警戒態勢を続けるルーナにアランが呟く。

『・・・あ! さすがにやりすぎたかな?!』血にまみれた顔でエヘへとはにかむのを見たナルがどこから持ってきたのかハンドタオルを投げてよこした。

『顔を拭いてから笑ってよ! 折角のかわいい顔が凶悪犯みたいで怖いよ・・・あだだ!』言い終わるか終わらないかの時に顔を拭いたルーナがナルの頬をつねった。

『まあ、とりあえずは攻撃も終わったんだ。さあ、今度こそこっちの反撃だぜ!!』

自らも脳漿に射撃を加えた時に浴びた血液をタオルで拭き取るとルーナに投げ渡した。

『ナイフの血液や肉を拭かないと使いもんにならなくなるぞ』  
銃をガンホルダーに入れたジョルジョが呟く。

『さあて、街の人はどこにいるのかなあ？』血や肉を拭き取ったナイフをシースに入れずブラブラさせているルーナが言った。

武器を構えた彼女の姿は様になってはいるがやはりおとなしくしていた方が美人に見えて良いのだが、武器を渡した手前そんなことを言い出せる者は誰一人としていなかった。

―教会の地下室

『クツクツク・・・』

漆黒の闇の中、漆黒のローブに身体を包んで邪悪な雰囲気を漂わせ周囲には異形の者達を従えた悪の親玉のお手本になりそうな女性が水晶を邪悪な笑みで覗き込んでいた。

その水晶には、酒場から出て街の中心部へと向かうルーナ達の姿がくつきり写っていた。『どうやらアタイの可愛い僕達しもへがやられた様だね。でも次はどうかしら？』

そう呟くと漆黒の闇から何者かを呼び出し、彼等の元に送り込んだ。その何者かとはアラン・ダナウェイの同期に当たるレイン・ウェルネスであった。

―街の中心部

『ここからは各自で探索するしかねえなあ。良いか、もし魔物の本体を見付けてもすぐに攻撃しないで発信機の裏にあるボタンを押し居場所を知らせてくれ』

そう言うのアランとジョルジョは別々の方に行ってしまった。

『んじゃ、アタシ達は西側から調べますか』そう言うルーナとナルは西側の商業地区に向けて歩き出した。

―北側大通り

『さて・・・、まずは普通の民家から調べて行くか』

アランは呟くと最初の民家の入り口の左側に身を寄せるとドアノブに手をかけて半開きになると一気にドアを開けて銃を内部へと入れ安全を確認してから中へと突入した。

―東側の通り

『・・・何もねえか』

ルーナとアラン、そしてナルと別れてからは順調に探索を続けているジョルジヨ。

既に4軒目の民家に入った所だ。

しかし未だ魔物はみつかっていない。

『・・・何でこんな場所にコイツが・・・』そう言うと床に落ちていた散弾銃を取り上げハンドガンをガンホルダーにしまった。

『にしても・・・今何時だ・・・』

時計をみるとまだ深夜1時を回った所だ。

外は真っ暗で頼りになる明かりと言えばまだ家々に灯っている電灯だけだ。

もし今、全ての明かりが消えることがあれば確実に恐怖に押し潰されるだろう。

そんな事を考えていると不意に背後から何か嫌な空気が感じられたので振り向くとそこにはV・S・S・E・隊員のレイン・ウェルネスが、青白い顔で立っていた。

『何でお前がここにいるんだ？レインよう』そう言ってレインに近付いた時！！

ずぶり・・・

ジョルジヨの胸を一本のナイフが貫いた。

『ぐ・・・あはあっ・・・てめ・・・え』

口から多量の血を吐きながらナイフを抜きにかかるがレインの容赦ない回し蹴りが顔面を襲う。

『・・・ニシム、カンリヨウ』

そう言うとレインは闇にスルリと溶ける様に消え、  
ジョルジョだけがそこに残った。

第五話・・・終了

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9128a/>

---

テイルズ・オブ・ティラスイール

2010年10月17日03時57分発行